

談話分析

ことばはどのように使われているか

国立国語研究所 日本語教育センター 西原 鈴子
日本語教育指導普及部長

このコーナーでは、これから研究を目指す海外の日本語の先生方のために、日本語学・日本語教育の研究についての情報をおとどけています。今回のテーマは談話分析です。

1. 談話分析の目的

「談話」は、ことばがコミュニケーションのために使われるときに作る、文脈を持ったまとまりのことです。「ディスコース = Discourse」または「テキスト = Text」と呼ばれることもあります。「談話」には、話された談話と書かれた談話があります。「談話」は、機能・構造・運用の面でその構成要素である「文」とはちがうので、それを明らかにすることが「談話研究」あるいは「談話分析」と呼ばれる研究の目的です。

研究には大きく二つの傾向があります。一つは、談話がその構成要素である文や語をどのように組み合わせて作られるかという、談話の情報構造に注目する流れです。久野（1978）牧野（1980）はこの流れの研究例です。もう一つは、人がことばを使ってどのような伝達行動を行うかという対人関係の言語運用に注目する流れです。語用論（Pragmatics）の領域に深く関係しています。メイ（1996）はそのすぐれた解説例です。

情報構造の側面では、「は」の提題機能、「コソアド」の指示機能などが研究の対象になります。対人関係の側面では、発話の対人機能が研究の対象になります。たとえば「今晚いっしょに食事をしませんか」という文は、「否定疑問文」ですが、談話の中では「勧誘」という機能を持っていると考えられます。そのように、言葉がど

のような目的で使われるかを、談話の対人機能として分析するのです。ただし、研究のこの二つの流れは、はっきり分かれているわけではなく、複合的に組み合わせられて研究されています。

談話分析では、たとえば、「食事に誘う」という「勧誘談話」を達成する過程で、どのようなことばが使われるのかを調べ、複数の文のつながりがどのように展開するかを記述します。談話のまとまりの中で、どのような「主題 = Theme」と「叙述 = Rheme」が情報の流れとして組み合わせられるかを分析することもできます。同時に、ことばの「くりかえし」「照応 = Anaphora」「省略 = Ellipsis」「隣接ペア = Adjacency Pair」「話し手の交替 = Turn Taking」「ポーズ = Pause」のような展開の仕組みに注目することもあります。

ことばを学習する場合、学習者は文の構造だけでなく、実際の場面や状況の中で文がどのように使われるのか、つまりその言語の「談話」のしくみ、を習得しなければなりません。ですから、言語教育に関わる人々にとっては、談話分析はことばの実際の使われ方を明らかにする貴重な資料を提供してくれる研究分野といえることができます。

2. 談話分析の方法

談話の研究は、書かれた談話も話された談話も、徹底



して「なまの資料 = Raw Data」からの帰納的分析方法をとります。頭の中で考えたことばではなく、実際に使われたことばを記録し、その中に見いだされる傾向や規範を見つけだしていくのが談話分析の方法です。特に、「会話分析」と呼ばれる分野では、可能な限り自然なことばのやりとりを記録してそれを忠実に再現し、その中にくりかえし表れる方略 (Strategy) を発見しようとしています。そのためには、ことばのやりとりだけでなく、イントネーション、ポーズ、話し手の交替の順番、話し手の間のことばの重なり、なども記録することになります。

現在よく研究されているのは、機能によって分類された談話です。「依頼 = Request」「拒否 = Refusal」「謝罪 = Apology」「勧誘 = Invitation」「主張 = Assertion」などがそれにあたります。また、伝達手段によって分類された談話も多くの研究の対象になっています。書かれた談話では「手紙」「新聞記事」「広告」など、話された談話では「電話会話」「座談」「物語」などがあります。日常生活の場面でおこる「教室談話」「買い物行動」「初対面の会話」などが研究の対象となることもあります。その他、談話参加者の種類によって「大学の講義」「議会演説」「母と子の会話」「女性同士の会話」等に分類される研究もあります。

3 . 日本語の談話に見られる特徴

書かれた談話、話された談話の分析を通して、日本語の談話の特徴が次第に明らかになってきました。メイナード (1993) は、日本語会話のあいづちの多さ、終助詞など聞き手めあての表現の多さなどを例として、日本語の会話は「自己コンテキスト化」しやすいという特徴があ

ると書いています。メイナードによって「自己コンテキスト化」と名付けられた、話すときに周囲の状況に注意して自分だけを強く押し出すことを避ける戦略は、Hinds (1976) では日本語会話の衝突を避けようとする傾向として分析されています。ザトラウスキー (1993) は、日本語の電話会話の分析を通じて、話し相手の反応を予測して対応する「気配り発話」の存在を特定しています。これらの研究は、日本語の談話の特徴を説明するために役立つ成果を生みだしているのです。

4 . 談話構造の「転移」と日本語教育への課題

以上挙げたような日本語の談話の特徴は、日本語を学習するときに学習者側の習得上の問題となることがあります。たとえば、日本語で電話しているときに、日本人から「もしもし、聞いている？」と言われた人は、日本人のようにひんぱんにあいづちをうたなかつたのでしょうか。そこで、相手の日本人が不安になり、本当に話を聞いているのか確かめたくなったわけです。この人は英語の母語話者だったので、日本語で話しているときにも、英語の会話の中でのあいづちと同じ頻度でしか「はい... ..はい.....」と言わなかつたのでしょうか。このような現象を、第一言語から学習する対象となる言語への談話パターンの「転移 = Transfer」といいます。

日本語教育に関係する人々は、学習者が無意識のうちにならぬ彼らの第一言語の談話パターンの転移を行ってしまうということに気づいて、その問題の解決を考えなければならぬと思います。そのために談話分析の成果を大いに活用することを希望します。

参考文献

久野 暲 (1978) 『談話の文法』大修館書店
 国立国語研究所 (1983) 『談話の研究と教育』大蔵省印刷局
 国立国語研究所 (1987) 『談話行動の諸相 - 座談資料の分析 -』三省堂
 国立国語研究所 (1988) 『談話の研究と教育』大蔵省印刷局
 ザトラウスキー・ポリ (1993) 『日本語の談話の構造分析 - 勧誘のストラテジーの考察 -』くろしお出版
 寺村秀夫他編 (1990) 『ケーススタデ

ィ 日本語の文章・談話』桜風社
 牧野成一 (1980) 『くりかえしの文法』大修館書店
 水谷信子 (1985) 『日英比較 話しことばの文法』くろしお出版
 メイ・ヤコブ (澤田治美他訳) (1996) 『ことばは世界とどうかわるか Pragmatics』ひつじ書房
 メイナード・泉子・K (1993) 『会話分析』くろしお出版
 Coulthard, Malcom (1977) An Introduction to Discourse Analysis, Longman

de Beaugrande, Robert & Wolfgang Dressler (1981) Introduction to Text Linguistics, Longman
 Hinds, John (1976) Aspects of Japanese Discourse Structure, 開拓社
 Hinds, John (1986) Situation vs. Person Focus (日本語らしさと英語らしさ) くろしお出版

* 談話分析に関する論文は数多く出版されていますが、今回は公刊図書のみを挙げました。